

## 御由来

人皇第十代崇神天皇の頃、出雲地方よりこの地に氏族が移住せられ、この地を『柳田郷』と名付け、氏族の祖神たる櫛稲田姫命、素戔嗚命、大己貴命(大国主命)を守護神とし『柳田大神』と称しました。御創建は崇神天皇甲申の歳と伝えられています。

大化改新後、国の行政も次第に整い国司の制度が始められてゆく中に元正天皇の御代養老二年(七八年)閏四月八日石神台山頂より、奉遷歴勅を以て相模国八郡神祇の中心たる、相模国の総社として現鎮座地に遷座いたしました。

平安時代に入つて相模の国府(今の県庁)が現在の犬磯町国府本郷馬場公園付近に置かれると柳田郷の地名も相模の国府と称されるようになりました。

以来、国司(現在の知事)は、任国に着くとまず神拝といつて国中の主たる神々を順拝し国幣を頒つ制度であつたが、順拝は大変な日数と費用人員を要するため主たる神々の御分霊を合わせ祀る社すなわち『総社』を設け日々の祈願所としました。

相模国の場合、柳田大神に、一之宮寒川神社、二之宮寒川勾神社、三之宮比々多神社、四之宮前鳥神社、平塚八幡宮の分霊を合わせ祀り相模国総社の成立を見ました。又、六ヶ所の神社を併せ祀るところから六所神社、また国府六所宮とも称されるようになりました。

相模国府祭(神奈川県無形民俗文化財)もこの時代から『お祭り』の性格を持つようになったと思われまふ。

そして、鎌倉時代になると源頼朝公の崇敬誠に篤く、吾妻鑑によると治承四年(二八〇年)十月十六日の条、平氏の大軍が、平維盛を大将として富士川に攻め寄りし時の戦勝祈願を始め、奥方の北条政子の安産祈願等たくさんの記録があります。

戦国時代には、戦国大名北条家の崇敬も大変厚く、氏綱公が永正年間(一五〇一、一五〇二年)に社殿の御造営、又四代目左京大夫氏政公が

御本殿の御修復を行いこの本殿が現在のものがございます。

天文十三年(一五四四年)十二月二十三日付けの北条氏康寄付状があり、相州六所領六十五貫七八文とある。又、徳川家康も崇敬の念篤く天正十九年(一五九二年)武運長久の祈願として六所領五十石の寄進の御朱印状があり、三代家光公は慶安元年(一六四八年)国家安全祈願として五十石の御朱印状があり、以後歴代の将軍の特別なる祈願と六所領の寄進があり明治に至っております。

## 社領の概要

往古は、相模国の総社、また国司の祈願所として多くの社領を有しました。

現在確認できる、社領の概要は、天文年間(一五七四)に成立した小田原北条家『小田原衆所領役帳』の関東の主な神社の中に『相州六所領六十五貫七八文 国府生沢に伏』とあり、江戸時代の石高に換算すると数百石に相当する広大な社領が見受けられます。

小田原北条家滅亡後、武蔵国江戸に居城を構えた徳川家康よりの『社領五十石寄進状』(天正十九年)には『相模国小中郡之内国府五拾石之事 云々』とあり五十石の社領は安堵して頂けましたが、戦国時代に比べ大変減少してしまいました。しかし、相模国内の神社の中では、大変大規模な社領を引き続き有していた事が窺われます。ちなみに、相模国内の神社で、最大の社領は寒川神社の百石です。



## 主なる祭事

### 相模国府祭(神奈川県無形民俗文化財)

毎年五月五日に六所神社(神揃山 逢親場馬場公園)にて斎行されるお祭り、神奈川県無形民俗文化財に指定されております。

平安の御代、都から各国々に派遣された国司は任国に着くとその国の平和や五穀豊穡を祈り国中の主な神々に祈願をしました。

国々の中心は国府と呼ばれ、国司を始め役人が常駐し行政の中心として繁栄しました。国司は国府近くに総社を設けて国の主な神々の御分霊をお祀りし、日々の祈願所といたしました。これが総社の起源になりました。

そして、相模の神々は二年に一度、国府に同じに集まり、御分霊を相模の総社六所神社に納める事となりました。それと共に、国司と神々が相模の平和と五穀豊穡を祈願し、相模国中の豪族を交えての盛大な祭典が斎行されるようになりました。これが相模国府祭の起源です。

平安の御代から千有余年の歴史を重ね、江戸時代には数日に及ぶ大きなお祭りとして伝えられてきましたが、現在は五月五日終日に渡り斎行され各神社の神輿渡御、様々な神事を始め多くの露店で賑わいを見せます。

当日は、午前九時半に六所神社にて総社御大祭が斎行され国府祭の無事斎行が祈られます。終日様々な神事が斎行されますが、特に正午に行われる古式座間奏、午後に行われる鷹の舞、逢親場祭典は多くの見学者が集まり、厳粛な神事に息を呑みます。

かつては天下祭、国中最大の祭祀と謳われた国府祭ですが、伝統を今日に伝え今も相模の神々の歴史、関係を物語っております。